

氏名(本籍)	おお 大 田 信 良 (東京都)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 乙 第 2351 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	帝国の文化とリベラル・イングランド

主 査	筑波大学教授	博士(文学)	荒 木 正 純
副 査	筑波大学教授	博士(文学)	宮 本 陽一郎
副 査	筑波大学准教授	博士(文学)	吉 原 ゆかり
副 査	筑波大学講師	博士(文学)	齋 藤 一
副 査	慶應義塾大学	Ph.D.(文学)	武 藤 浩 史

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、「帝国主義」と「ナショナリズム」が交錯した両大戦間の時期のイギリス文化とそのイデオロギーを対象に、その存在様式と変容過程を解明している。本論文の構成は、以下のとおりである。

序章 帝国モダニズムと帝国

第Ⅰ部 「リベラル・イングランドの奇妙な死」再考

第1章 「ブラウン夫人の表象－福祉社会、ジェンダー、リベラリズム」

第2章 「モダニズム的(反)成長物語の中の優生学と女性参政権運動^{サフレジズム}」

第3章 「リベラリズム以降の政治意識?－『ダロウェイ夫人』におけるスタイルへの意志」

第Ⅱ部 モダニズムの「国際」政治学

第4章 「ロレンスとナショナリズム言説」

第5章 「人種、英米関係、『羽毛の蛇』」

第6章 「地政学的無意識－『波』、ルイス、グローバリゼーション」

第Ⅲ部 英国の表象と帝国の文化

第7章 「英国モダニズムと帝国の(再)編制」

第8章 「帝国、アメリカ、太平洋の表象」

第9章 「帝国の文化とウルフ」

終章 グローバル化する文化とさまざまなモダニティ

序章は、最新のモダニズム論であるジェド・エステイ(Jed Esty)の『収縮する島：英国におけるモダニズムと国民文化』(*A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England*) (2004)を批判的に概説し、本論文の概要とその位置についてのべている。

第Ⅰ部は、ヴァージニア・ウルフとリベラリズムに焦点をあて、「リベラル・イングランドの奇妙な死」という問題を扱い、第1章は、英国モダニズム文学・文化の形成に重要な役割を果たしたウルフとモダニズムとの関係を検討し、英国社会主義という社会的・文化的脈絡において、ウルフのエッセイが表象するブラ

ウン夫人のもつ意味を解釈することにより、ポスト自由放任主義の英国社会においても、リベラリズムが存続しつづけたと論じている。

第2章は、ウルフの『ジェイコブの部屋』をとりあげ、物語として表象される成長と反成長をめぐる歴史的・文化的編制過程に優生学とモダニズムとがどのように関与していたかを追究している。また、その作品は、第一次大戦後、女性が参政権を獲得したあとにおこった、フェミニズム内部の抗争や変化を刻印しているとし、性差問題を考慮しつつ、リベラリズム変容の歴史を追究している。

第3章は、メトロポリス・ロンドンを舞台にしたウルフの『ダロウェイ夫人』を対象に、ウルフは、そこでいかに「社会システム」批判を企図したのか、またその「スタイルへの意志」はどのようなものであったのか、さらに、いかなる政治意識がそこに表象されているのかを追究している。

第Ⅱ部は、モダニズムと「国際」政治の関係を、英国のナショナルなレヴェルやヨーロッパの国際政治のレヴェル、さらには植民地等のレヴェルを含むトランスナショナルでグローバルな政治文化の空間において、再解釈している。

第4章と第5章は、男性リベラリズムと実際の政治的・文化的移動を表象する作品を書いたロレンスを対象とし、第4章では『恋する女たち』をとりあげ、いかにそれが、ナショナリズムとグローバルな英国帝国主義との間にみられる矛盾関係を示しているかを解明している。第5章では、『羽毛の蛇』を対象に、それが、人種関係やポストコロニアルな状況をいかに主題化しているかを追究し、そこではメキシコの非白人や植民地の問題が表象されているだけでなく、英米関係や、二つの帝国もしくは帝国主義の矛盾を孕んだ関係を密かに指し示してもいると論じている。

第6章は、ウルフの『波』を対象に、帝国の文化である英国モダニズムにおいて、アジア・太平洋がいかに重要であるかを指摘しつつ、反芸術家的な登場人物ルイスをとりあげ、彼の描写の分析をかいして帝国のグローバル化とそれに対する地政学的無意識が存在していることを解明している。

第Ⅲ部では、帝国の文化を構成するリベラル・イングランドとモダニズムの「国際」政治学について論じたあと、トランスナショナルにグローバル化する文化の脈絡において、ナショナルな英国の表象を再解釈している。第7章では、ジョン・バカンのスパイ小説とロレンスの『恋する女たち』とを並列的に扱い、大英帝国が植民地やヨーロッパとさまざまなとり結ぶ政治的・文化的関係に注目し、英国モダニズムが炙り出す帝国のグローバルな（再）編制の過程を解明している。

第8章は、トランスパシフィックに移動する軌跡の描写をしたロレンスの『カンガルー』を対象に、帝国の文化をかいして、リベラル・イングランドとアメリカとがどのように関係づけられているのか、また、帝国の他者空間としての太平洋の意味、さらにアジア系移民の移動状況についても解明している。

第9章は、英米の関係を密かに表象するウルフの30年代の作品、たとえば『三ギニー』と『幕間』などを対象とし、英国国民文化とグローバリゼーションの関係をさらに追究している。これらは、反ナショナリズム、反ファシズム、あるいは国際連盟の表象をかいして、英国リベラリズムの変容と存続を提示しているという。ナショナルな英国とグローバルな帝国とのずれや二重性は、通時的には、あらたに覇権を握るアメリカとそのモダナイゼーションの表象に転位されているとしている。

終章では、本論で追究したことがらを整理したあと、旧来の国民国家を単位とする帝国主義とは異なり、リベラル・イングランドの系譜につながる現代の帝国においては、トランスナショナルにグローバル化が進行し、それに対応するそれぞれの国、地域、ロケーションは、異質な空間性・時間性を伴うモダニティの条件をになってきているので、英国のモダニズムに刻印された特異性は、現代の地球的（プラネタリイ）世界という観点からさらに追究する必要があるとしている。

審査の結果の要旨

本論文が採用している枠組みは、フレデリック・ジェイムソン (Frederic Jameson) のモダニズム論、とりわけ彼の「政治的無意識」という考え方であり、それを基盤として、両大戦間の英国文化を形成している「政治的無意識」を分析・追究したものである。

「モダニズムと帝国主義」の問題系は、従来の英文学研究では、ペリー・アンダーソン (Perry Anderson) やレイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams)、さらにジェイムソンなどによって追究されてきている。最近の成果は、後期モダニズムの再解釈をしたジェド・エステイの『収縮する島：英国におけるモダニズムと国民文化』であった。本論文の著者は、この研究の綿密な吟味からはじめ、それを乗り越えようとしている。エステイは、英国の国民文化がソフトなナショナリズムによって、盛期モダニズム文学の空間性と時間性をいかに再編制したかを追究した。その際、主に使用した作品は、ウルフの『幕間』と T.S. エリオットの『四つの四重奏』であり、とりわけエリオット保守主義に焦点をあてて課題追究をしていた。これにたいして著者は、エステイが注目しなかったウルフとりベラリズムに焦点をあて、英国のリベラリズムは、1920年代のモダニズム文化のコスモポリタニズムと共犯関係にあった帝国主義の原因をなしていたとしている。ここに本論文の特色があり、その課題追究は、従来の研究を補完するものとして独創的である。

さらに、著者が狙った課題追究には、もうひとつ重要な知的枠組みがあった。それは、1990年代になされた社会経済史研究の成果である。そこでは、英国福祉国家の編制の歴史が、慈善団体、友愛組合、労働組合、家族などの中間組織・団体に媒介された複合的な構造変化であると再解釈されていた。ここから、英国リベラリズムが死を迎えたという一般的な認識ではなく、それは新たに再編制されたという本論文の主張がうまれた。つまり、帝国の拡張主義と「英国性」(Englishness) への「徹底的収縮」の交差を内包している「帝国の文化」は、「リベラル・イングランド」を精髓とする「英国モダニズム」によって再検討すべきであるという主張である。

本論文が政治・経済的な論文ではなく、文学分野の論文であるゆえには、本論文をささえている作品テキストの綿密な分析・解釈にある。とりわけ第Ⅱ部の各章では、細密な議論が展開され、モダニズム文学がトランスナショナルな視点、トランス・パシフィックな視点で読みとる必要性が説得力をもって論じられている。

このように優れた本論文ではあるが、論証のために選択され具体的に分析された作品が、いささか恣意的な選択によったという印象は否めない。選択の必然的な理由を、もう少し丁寧に説明すべきであった。

とはいうものの、本論文の価値はそれで損なわれることはない。本論文の成果は、英米文学・文化研究だけでなく、モダニズムやグローバル体制の研究にも大きく資することがあると判断できる。

よって、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。